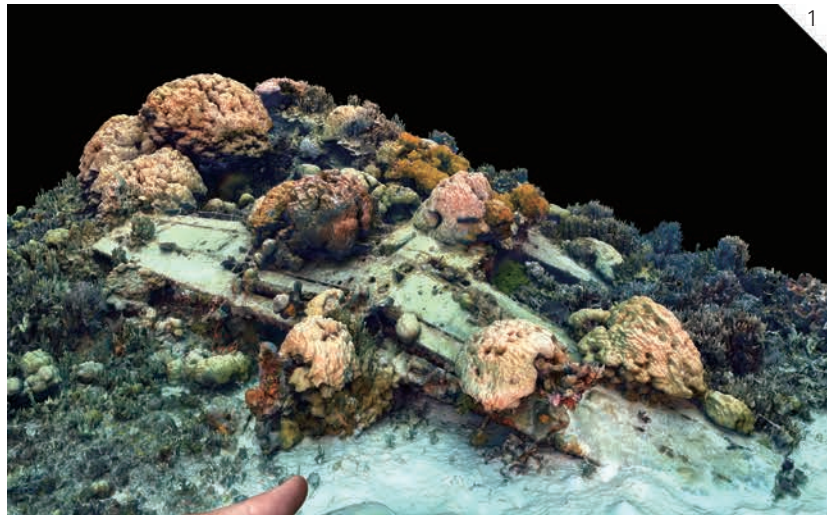


information

合同株式会社 アパラティス

米子市岡成186

☎ 0859-30-2033

🌐 <https://suichukoukogaku.com>

たのは、まだほんの「部」だ。

従来は水中で実測して図面を作成したが、山崎さんが写真から3Dモデルを作成する「フォトグラメトリ」技術に着目。水中遺跡に応用する方法を確立し、早く正確な遺跡のデジタル保存を可能にした。世界中から撮影・モデリングの依頼が絶えず、年間10カ所もの現場に潜る。

沈没船の多くは、漁師や近くの人が発見する。スペインのマヨルカ島では、古代ローマ船が7隻、観光ビーチのすぐ近くで見つかった。水中考古

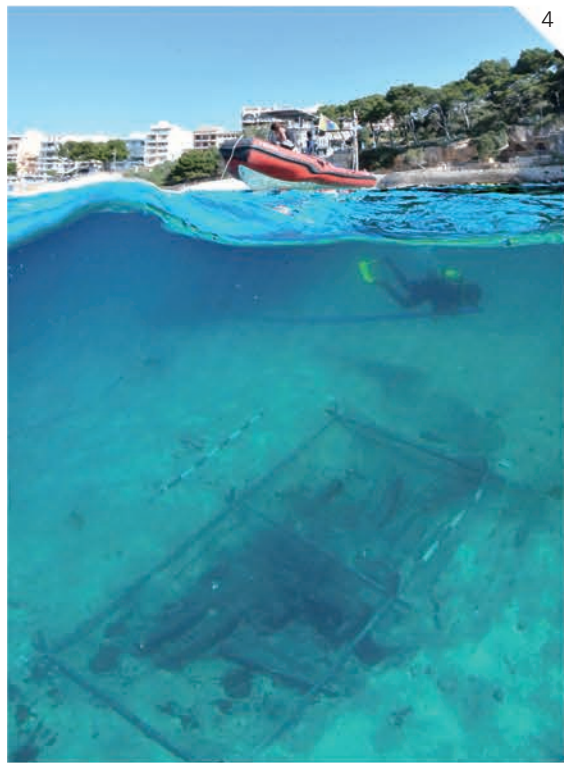
学の認知が高い地域では、何かを見つけると遺跡を疑って博物館などに連絡する。日本では同学問がまだ浸透していないため、見過ごされている遺跡が多いと考えられている。山船さんは「変わった石を『化石かも』と思うように、浜辺で見た木材を『沈没船かも』と期待してもらえらるほど、人気の学問にしたいですね」と意気込む。いま国内の大学とも連携し、講演やフィールドスクールなどを通して啓発に努めている。

歴史学は人類の道しるべ
未来のため、いま遺跡を残す

水中考古学の意義を問うと、山舩さんは「未来のため」と答えた。水中遺跡から紐解いた歴史は人類の過去の経験として共有され、未来への道しるべとなる。「過去を理解し、保護して、人類の将来をより良くするのが歴史学の役割です」と、山舩さんは断言する。

4

山船さんは今後、遺跡の保護に力を入れたと考えている。遺跡を残さなければ人々の記憶はどんどん薄れていくからだ。水中戦争遺跡の調査にも積極的で、沈んだ軍艦や戦闘機などの遺跡を守るため水中慰霊碑の設置を呼びかけている。山陰でも昨年、美保湾沖で「慰霊の会」らが発見



4. スペインのマヨルカ島では、2~5mの浅い水深に古代ローマ帝国時代の船が沈んでいて。保存状態は良く、古代ローマ帝国の船の沈没の解明が進みそうだ 5. ダイビングツアーイセナは、渡航前に日本で取得した。水深60mまで潜水経験がある。メキシコのサンタ・マルゲリタ島にて 6. クロアチアのジリエ沈没船調査。船は残っておらず、アンフォラ(古代の壺)が広範囲に散乱している 7. メキシコのサンタ・マルゲリタ島で蒸気船の調査。蒸気機関部を撮影中の山崎さん



した駆逐艦「蔵」の研究への支援を始めた。

さらに夢は、水中にこだわらず財政が厳しい国々の遺跡保存へと広がった。「さまざまな事情があつて自国では満足に研究に着手できない国にこそ、歴史学への支援が必要なのである。国が安定して自分たちの歴史に目をも向けたとき、風化してはいけなない。いま世界中に賛同を募つて、そういった国の文化遺産を保護する準備をしています」。山根さんは、過去を覗きながらはるかな未来を見据えている。

私たちも、日ごろの意識で歴史学や水中考古学がうんと身近になる。海辺の散歩で埋もれた木材を見つけたら、よく観察してみよう。もしかするとそれは、何百年も昔の船かもしれない。



山船晃太郎さん

1984年生まれ。2006年法政大学文学部卒業。テキサス農工大学大学院文化人類学科船舶考古学専攻。2016年博士号取得、同年「合同会社アバラティス」設立。テキサス農工大沈没船復元再構築研究室研究員。東京海洋大学非常勤講師、エクスタナード・デ・コロンビア大学外国人特別客員教授、九州大学共同研究企業代表。

水中考古学者・山船晃太郎さん

水中の歴史から 未来を見据える

考古学といえば、土を掘って土器や遺跡を掘り出す姿を多くの人が思い浮かべるだろう。だが、地表の7割は水に覆われている。その下に眠る未発見の歴史を追求め、7つの海を駆け巡る水中考古学者・山船晃太郎さんの活躍を紹介する。

「過去を理解し、保護して、人類の将来をより良くするのが歴史学の役割です」

水中考古学に出会い
「好き」の力で猛勉強

「フロリダの水中洞窟から、二万年以上前の人の脳組織が採取された」という記事を山崎晃太郎さんが本で読んだのは、大学で卒業論文のテーマを探していた最中だった。水中考古学者へと導く、人生を変えた邂逅（かいこう）だった。

山船さんは秋田県で生まれ、愛知県や千葉県で育った。子どものころは米子にある父・茂樹さんの生家に毎夏のように帰り、川や海で遊んだ。法政大学では古代西洋史を専攻。野球部でプロをめざしたが故障のため断念し、卒業後は歴史学と野球を教える教師になろうと考えていた矢先、水中考古学と出会った。

「1万年前の有機物組織が残っているなんて、陸上ではありえません。」

夢中になつて資料を読み漁つてゐるうちに、本格的に勉強したいと考えるようになりました」。当時日本で水中考古学を学べる大学はなく、世界的権威であるテキサス農工大学大学院をめざして渡米した。

入学後は言語の壁に苦勞し、授業を録音しては10時間以上かけて復習する日々が続く。「大変でしたが、楽しくて全く苦になりませんでしたね。好きだったらストレスなく楽しめる。私は1日10時間でも論文に読みふけります。若い人たちには特に、そういう夢中になれるものを見つけてほしい。じつと待たずに、合うう努力をしてみてほしい」と、山崎さんは熱く語る。



国して茂樹さんの生家に「合同会社 アパラティス」を設立。世界各地の調査・研究や、企業の商品開発などに携わって多忙な生活を送っている。渡航が難しいコロナ禍では、国内の仕事や執筆活動、リモート講義などに専念したが、通常は日本にいるのは年に1、2カ月程度。帰れば家族と愛犬が迎えてくれる。「鳥取は食べ物もおいしいし、ゆつくりするには良い場所です」と顔をほころばせる。

沈没船はタイムカプセル
国内にも水中考古ブームを

水中考古学とは、水中に沈んだ遺跡を研究し、水に関わる人類の歴史を明らかにする学問だ。水の中は酸素に触れないため、あらゆるものが良好な状態で保存されるという。

山船さんの専門は船舶考古学。これまで調査した沈没船は、紀元前のものも珍しくない。それらの船は、当時の世界の様子を教えてくれる。どこで何が産出され、どこに運ばれたか。技術の発達具合、都市間の交流、ものの伝播の仕方。陸上ではわかり得ない史実が、水底で待っている。その数、約300万隻。着手される